

# 市内からやって来る家族と地元農家で一緒に里山の復活を 「うらんとこ(おらがところ)はこんなに豊かな場所やったんや!」

中山間の耕作放棄地を教育ファームの圃場として積極的に活用する(社)ふくい・くらしの研究所。初めは遠巻きに見ていた地元の高齢農家たちも、参加する農業初心者たちの楽しそうな様子に次第に惹きつけられていき、そして、復活したそば畑の景観の見事さに、「昔みたいにそばをつくってみようや」という言葉まで飛び出した。今後は中心市街地の住民たちをも巻き込んで、地域の宝＝豊かな里山のさらなる活性化を目指していく。

## (社)ふくい・くらしの研究所

### 取組主体

- 名称：(社)ふくい・くらしの研究所
- 担当窓口：事務局長 帰山 順子  
住所：福井県福井市開発町第2号1番1  
電話：0776-52-0626 FAX：0776-52-0660  
E-mail：kaeriyama\_10357@fukuicoop.or.jp
- 団体等の種類：社団法人
- 活動内容を紹介するHPアドレス：<http://www.fukui.coop/kuraken/>
- 連携団体及び協力団体
  - ・属性：農林漁業者、県、市、JA、その他
  - ・内訳：土地提供者の農家、個人ボランティア(福井県、鯖江市、JA、食生活アドバイザー、その他)

## 取組地域及び地域の特徴

取組地域：福井県鯖江市尾花町(河和田地区)

地域の特徴：

福井県嶺北地方の中央部に位置する鯖江市。多くの世帯が、特産である繊維や眼鏡関連の産業に関わっていて、特に「めがねのまち」として全国的に有名である。

(社)ふくい・くらしの研究所は、鯖江市の東部に位置する河和田地区で教育ファーム活動を行なっている。河和田地区は、三方を山に囲まれる中山間地で、稲作が中心。耕作放棄地、遊休地も多い、山間の集落地区である。5年前までは、イノシシなど鳥獣被害に頭を悩ます農家もみられたが、最近では、電気柵の普及もありイノシシの被害は減ってきている。



食育体験サロンの看板

## 取組内容

### (1)目的(目標)

当初は畑作(放棄地の耕作)が目的であったが、現在は稲作(もち米)まで作付けできるようになった。

- ① 通年型の農業体験で、食べものをありがたくいただく気持ちの醸成と家族のコミュニケーションを深める。
- ② 耕作放棄地の活用で地域活性化と里山の保全に取り組む。
- ③ 耕作放棄地を活用したもち米づくりによる生産・加工体験を通じて、地産地消を推進する。
- ④ もち米とそばをメインに、地域連携のイベントで食の伝統文化を学ぶ。

### (2)取組開始時期・経緯

「耕作放棄地を活用した畑・田んぼの体験に都市部の家族が参加することで、自然、農業、生きものとの触れ合いを体感し、あわせて地域の高齢者の生きがいづくりにもお役立ちすること」を組みのねらいとして、平成18年に食育体験サロンを立ち上げ、福井市でサツマイモ栽培を、平成19年は大野市で大豆栽培を行ない、県内家族への公募で農業体験活動を始めた。

本格的に教育ファーム活動のためのほ場を探しているとき、福井県立大学のオープンカレッジに参加し、出会ったフィールドが河和田地区であった。

平成20年度より耕作放棄地を活用した畑づくりに携わり、収穫の喜びとともに農作業の大切さや、耕作放棄地がなぜできるのかを体感した。また、山間部の集落に継続して通う間に地域のつながりもでき、地元住民との交流も行なえるようになり、過疎化・高齢化する里山の集落の活性化にもつながりつつある。



参加者も増えてきた

### (3)対象作物

米、野菜、きのこ、その他

作物名・種類:もち米(タンチョウモチ)、そば、ジャガイモ、トウモロコシ、サツマイモ、大豆、大根、えちぜんカンタケ、しいたけ(原木栽培)、ゴマ、サトイモ、オクラ、ゴーヤ、えんどう、ささげ、空豆等

#### (4) 具体的な取組内容

〈年間プログラム(平成22年度)〉

4月	ジャガイモ(キタアカリ)の植付け、しいたけの菌打ち、トマト苗づくりの講習
5月	ジャガイモ(インカ)の植付け、トウモロコシ種播き、里芋、ナス、キュウリ、ピーマン、トマト、赤ずいき、ささげ植付け、サツマイモ苗植え
6月	田んぼの畦塗り、田植え、ごまの種播き、田んぼの草取り
7月	ささげ棚づくり、大豆種播き、大豆わらしき、ジャガイモ、ささげ収穫
8月	トウモロコシ収穫、田んぼのヒエ取り、キュウリ、オクラ収穫、田んぼのコナギ取り
9月	ラポーゼ・かわだ「残暑祭」出展、大根、赤かぶ種播き
10月	稲刈り、サツマイモ掘り、大豆、サトイモ収穫
11月	そば収穫・脱穀、えちぜんカンタケ栽培講習会
12月	そば打ち体験、大根収穫、しめ縄づくり講習会
1月	「くらなび農園大感謝祭」
2月	味噌・豆腐づくり



おじいちゃんと耕耘機を押す

#### (5) 参加者

県内在住家族(平成21年度17家族51名、平成22年度13家族50名)

#### (6) 経費

- ・1家族の参加費年間 5000円(会費)
  - ・(社)ふくい・くらしの研究所より 30万円(ほ場、種代など)
- その他収入として
- ・参加者に米(もち米)販売 1kg300円程度で販売予定
  - ・味噌の販売 1kg450円程度で販売予定

## 課題及び対処方法(ポイント・工夫)等

ほ場のある鯖江市河和田地区の鳥獣被害対策を学んでいく過程で関係のできた、福井県や鯖江市の行政関係者が個人ボランティアとして参画。今では貴重なスタッフ兼指導者になっている。月2回の取組み日のほか、草取りなど田畑の管理に来てくれる。行政関係者を上手に巻き込むことで、結果的に専門的な知識を持つ

たスタッフを確保することにつながっている。

全員で作業する「共同畑」と、家族ごとに好きな作物を植え各々で管理を行う「家族畑」とで取り組みを行う。「共同畑」の植付け作物は、主の作物（もち米、そば、大豆など）以外は、福井県の個人ボランティアと相談しながら、事務局で決めている。今年度植付けした空豆はまったく収穫できず、土地に合わない、あるいは気候などの問題でそういうことが起きることを体感することで、農業の難しさを学ぶことにもつながっている。

ほ場では、怪我をさせないことに注意している。たとえば、小型耕耘機を使用する場合は、子どもに必ず大人が付き添う。草刈り機は事務局が行ない参加者には使用させない。その結果、現在まで問題は起きていない。

農薬の使用については、共同畑では初期の農薬を最低限使用はするものの、家族畑では農薬の使用を禁止するなど、約束事を決めている。



家族畑の親子

## これまでの成果

- (1) 参加親子に食に関する意識が強くなり、牛やヤギとの触れ合いを通して食の循環を考えるようになった。また、自分たちで育てることで、農作物やその加工品にかかる原価も考えるようになり、適正な市場価格が理解できるようになった。
- (2) 農業初心者の楽しそうな様子を見て、地元の農家が次第に栽培のアドバイスをするようになり、交流の輪に広がりが出てきた。
- (3) そば畑の景観の見事さを地元の高齢農家が改めて気づき、昔のようにそばをつくらうという話が出てきた。そうして、そばの脱穀・乾燥も農家が手伝い、そば打ち大会には地元のそば打ち名人も参加するまでになった。



復活したそば畑

- (4) 大豆で味噌づくり・豆腐づくりも農家の指導で行なえた。
- (5) 21年度から始めた田んぼ(25アール)のイネづくりに、昔の農具が現役復帰。
- (6) ヤギの親子も畑の仲間に参加し、癒し役兼雑草処理サポーターに。近くの山林には「若狭牛(雌の妊娠牛)」が林間放牧されて、牛と触れ合いながら獣害も減少。
- (7) 実施主体にとっても、農業体験を通して農とのつながりや「食」を考え、スタッフ・参加家族とのつながりから「ネットワーク」ができ、その地域の住民とのつながりから中山間地の山里の農業の問題点を住民とともに考えるようになった。
- (8) 「くらなび農園」は、農のあるくらしの豊かさへのナビ(道案内)の場となっている。

## 今後の構想、課題

水田の働きや生きものの観察など、さらに循環型の農業や「食」への関心を高めた市民(家族)を増やし、中心市街地の市民を巻き込んだ持続的な里山の活性化に取り組みたい(鯖江市民の参加が少ないので、市内の参加者を増やしたい)。

また、里山の環境保全に取り組む団体とともに協働で実施し、今後につなげていきたい。

ほ場の確保については、耕作放棄地や遊休地もあり問題ないのだが、近くに市民農園があり10坪5000円で貸し出しているの、地域のつながりを考慮し無料で借りることができない状況である(畑は年間使用料5万円、田んぼは好意により無料)。農地・水・環境保全向上対策や中山間地等直接支払交付金などあるが、これについても地域の考え方があり、思うように利用できない場合がある。特に河和田地区の農業関係者や地域住民とのつながりが大切であり、地元のそば打ち名人を講師に招くなどして、交流を深めている。

参加者家族に、ここの農園に来るのが楽しく来年も継続して参加したいと思ってもらえるよう、家族畑での収穫も含め共同畑でとれた作物を分配したりその場で食べたり、作物の料理指導などを行ないながらコミュニケーションを図っている。

## その他

携帯メールなどを活用しながら、指導者との連絡や参加家族への情報提供を行ない、大きなイベント(「くらなび農園大感謝祭」など)の際は、(社)ふくい・くらしの研究所のHPや鯖江市の広報誌を活用して広く情報提供を行なっている。今後は、ブログなども活用したいと考えている。

(社)ふくい・くらしの研究所

## みんなのコメント集

取組の  
実践者“簡単に収穫できない悔しさが  
再チャレンジの源!”

## 参加していた指導者

「河和田地区での農業体験も3年になり、内容についても充実してきています。ただ、地域の理解は得られてきている一方で、地域の住人の参加はなく、これからかなと考えています。地域の住人の方に理解を得られるようになれば、ほ場の肥培管理がより楽になるんですけれどね。

参加家族にとっても私にとっても、新しい作物に挑戦するときは、畑の準備から苦勞して管理をつづけてきて、それなのに収穫できなくてガッカリということもあります。でもそのときこそが、農業の難しさを感じるチャンス。簡単に収穫できない悔しさが再チャレンジの源になり、とても良い経験になっていますね」



やれやれ一服

参加者

“農業は大変だからやめられない!”

## 子どもと参加するお父さん

「子どもの野菜の好き嫌いがなくなりました。耕耘機とかの機械に興味を持つようになり、収穫したジャガイモで自らカレーをつくるなど、積極的になりましたね」

## 参加3年目の夫婦

「家庭菜園をやっているんですが、技術的なことがわからないんです。それがここに来ると、作物ごとに技術も得られるので、大変ありがたいです」

「農作業は大変だけれど、その大変さがやめられないっていうか……」

## 参加1年目の鳥獣被害調査員(ハクビシン担当)の女性

「農作業を始めて、作物にどんな被害(虫や鳥獣害など)があるか理解できるようになりました。それと、スーパーに買物に行って、国内産野菜がなぜ高いのかも理解できるようになりました。

農作業は大変ですが、自分で野菜をつくって自分で料理をすることで安心な食生活を送ることができると思います」



農園全景